

花雨を窓にわびぬる籠居こもりや琴とれば音のしめりからなる

起 雲

春明けや仰げばかすむ天地に花とわれとのうたの領かな
天つ女がけはひの料とかしこみて匂ふに似たり春の草花

◎短歌募集

△課題 隨意

△〆切 毎月末日

△發表 本誌上

△賞品 三光には粗景を呈す

△選評 眞宮起雲

△投稿 用紙は隨意にて左記の所に送らるべし

但添削及返稿を要せらるゝ方は往復はがき

又は切手封入にて送られたし。

「伊勢國白子局區内みどり短歌會」

第二十回俳句端書集

大分

賀志野に駒乗出す春日かな
麗や猫が爪磨ぐ庭の石

岡山

山に添ふ觀音堂や桃の花
雪の日や世は偽りを學びけり

長野

春風や霞の上を軽く吹く
凱旋や席にあまりて梅かほる

仙臺

足洗ふ門に落花のしきりなり
春の雨堤の柳けぶりけり

仙臺

摘取りてアツクにはさむ葦かな
舟遠く見えて小島の遠霞

川越

遊び癖知りつゝ今日も歌がるた
猿曳の袖寒げなり長暖

川越

小屏風の江戸繪破れし憎火かな
蓮戸や妙義風に煙る情

川越

粥煮つゝ天狗嘶や憎明り
龍夜や小町が家の薄ともし

川越

散り初めし緋桃の下や鯉跳る
春雨や傘に數片の花散りて

春月

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

月

洋

舟

霞

瓢

樓

醉

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

人

長閑さや羊を追ひつ牧場まで
 遠山の薄紫や夕ひばり
 朝風の袖につめたき梅見かな
 青柳や漁翁はいまだ歸らざる
 菜の花や紙漉小屋に鷄の鳴く
 岩蔭に宛かくれぬ残る雪
 道連の殖えて嬉しき花見かな
 重さうになりて夜に入る柳かな
 鉛白を買ふて戻るや月おぼろ
 一貫の錢を泥手に覗賣り
 雨一夜二夜つゞきし初蛙
 江にかすむ舟四五艘や歸る雁
 一群は女ばかりや歳がり
 雲水に物問ふて見る日永かな
 若草や誰が休らひし尻の跡
 鐘つゝむ霞の裏や寛永寺
 大名の行列つゞく霞かな
 藻鹽焼く煙りも淡し春日和
 出代の女にすゑぬ二日灸
 踏つぶす椿數多や寺の庭
 功名の物語りせよ春の雨
 乳母車桃の林に引き入れて
 姿見に八重の櫻や理髮床

甲	大	靜	信	東	近	遠	下	横	群	熊
州	阪	岡	州	京	江	州	總	濱	馬	本
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
泉	き	樂	耕	春	古	愛	梅	醉	文	天
岳	よ	水	村	綾	杉	水	泉	月	久	外

夜深くつめたき石や春寒し
 春寒し別れの酒を暖むる
 不意と顔出して恥かし雲の朝

三光

天 雲雀野や夢踏む人のそこやこゝ
 地 蛙飛んで湖に動きぬ倒不二
 人 捨てられて道端に咲く菜花かな

追加

濡れて行く絹の脚絆や春の雨
 鎌肩に小牛をつれて夕かすみ
 賣物になるや老婦が桃の花

無一庵奇零

三十四

栃木 さだ子

埼玉 同

長野 曉

東京 ちよう女

大分 春

月



世の中の横幅しらぬ燕哉

柳 居

妻にしも幾人思ふ櫻狩

破 笠